

抗がん剤の副作用について No. 1

骨 髄 抑 制

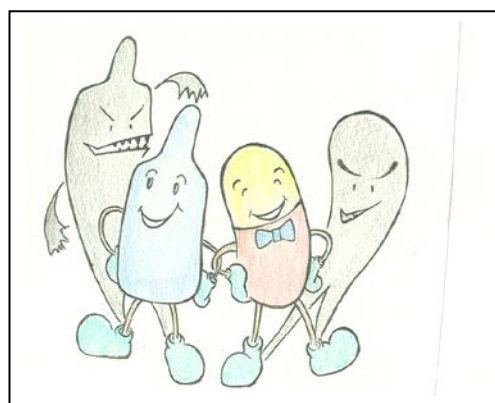
はじめに

薬の代名詞として両刃の剣（もろはのつるぎ）という言葉がよく使われます。

その理由は、期待する効果と、体に有害な作用の両方があるからです。そして抗がん剤ほど、この“両刃の剣”という表現がぴったりあう薬はないでしょう。がん細胞の構造は、正常な細胞に似ているために、抗がん剤はがん細胞には効果的に作用し、正常な細胞には悪影響を与えるからです。つまり、抗がん剤の期待される効果とは、がん細胞を殺すことですが、抗がん剤はがん細胞だけでなく、正常な細胞も攻撃し、それが副作用として現れてしまいます。

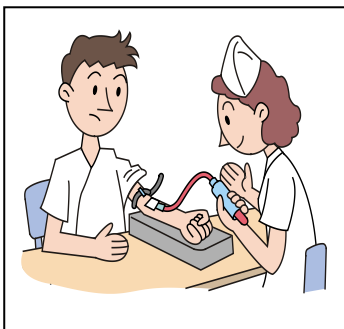
では、どのような細胞が影響を受けやすいのでしょうか？ それは、骨髄細胞のような一般に寿命が短く、細胞分裂がさかんな細胞です。副作用の現れかたは、抗がん剤の種類、抗がん剤を使用する量、抗がん剤の併用方法（組み合わせ）の違いや、また、患者さん自身の状態によっても異なってきます。

抗がん剤の副作用をシリーズで紹介していきますが、今回は、第1回目として骨髄抑制について説明します。



骨髄抑制とは・・・

白血球、血小板、赤血球など血液の細胞成分は、骨の中心部にある骨髄の幹細胞でつくられます。骨髄は、細胞分裂が盛んな細胞なので、特に抗がん剤の影響を受けやすいため、抗がん剤により、血液をつくる働きが低下し、血液の細胞成分（白血球、血小板、赤血球）が減少します。これを骨髄抑制といいます。これらの細胞の寿命は、白血球が約3日、血小板が約7日で、赤血球が約120日あるので、白血球減少、血小板減少は早くに現れ、抗がん剤を使用して、7日から14日後に白血球や血小板がもっとも少なくなります。この時期は、特に感染や出血に注意する必要があります。また、この副作用はほとんどの人に現れます。しかし、必ずしも自覚症状が現れるわけではないため、血液検査をして、副作用が現れているかどうかを調べる必要があります。



* 白血球減少について

白血球には種類があり、それぞれ働きが多少異なりますが、細菌などの侵入物（病原体）を自らの体内に取り込み、殺菌したり、消化したりします。従って、白血球が減少すると、病原体に対する防御ができなくなり、感染しやすくなります。白血球のなかで好中球がリーダー格となるので、好中球の検査値が感染傾向にあるか否かの指標とされます。

生活上の注意・・・感染しやすい部位からの病原体の侵入を防止することが大切です。外出時はマスクをし、人ごみをなるべく避けましょう。うがい手洗いをしましょう。
また、尿道や肛門も汚染されやすいので、清潔にすることが大切です。排泄後の水洗い（シャワートイレの使用）も効果的です。

使用薬剤・・・検査値や症状によっては、白血球をつくるのを助け、白血球が少ない期間を短くする作用の注射薬フィルグラスチム（グラン）やレノグラスチム（ノイトロジン）を使用します。
白血球減少時の発熱には、抗生物質等（細菌を殺し感染を防ぐ薬）をただちに使用することが必要です。それは、白血球減少中の発熱（特に38℃以上）は敗血症等の重症の感染症を合併している可能性があるからです。

* 血小板減少について

血小板は血液の凝固（止血）に大切な働きをしており、これが少なくなると出血（鼻・歯ぐき・皮下）や目の充血が起こりやすくなります。

生活上の注意・・・転倒や打撲をしないよう気を付けましょう。同じ姿勢を続けたり、体を圧迫しないようにしましょう。ハブラシは柔らかいものにして、強くこすらないようにしましょう。

使用薬剤・・・検査値や症状によっては、血小板を輸血することがあります。

* 貧血（赤血球減少）について

赤血球が少なくなると、赤血球によって運ばれる酸素も減少します。そのため、体の臓器が酸素不足になり、手足の冷感・しびれ・立ちくらみ・倦怠感・息切れなどが現れます。

生活上の注意・・・動きはじめる時、ゆっくり動作をしましょう。体を冷やさないよう心がけましょう。

使用薬剤・・・症状や検査値によっては、貧血の薬（鉄剤）を使用したり輸血をします。

